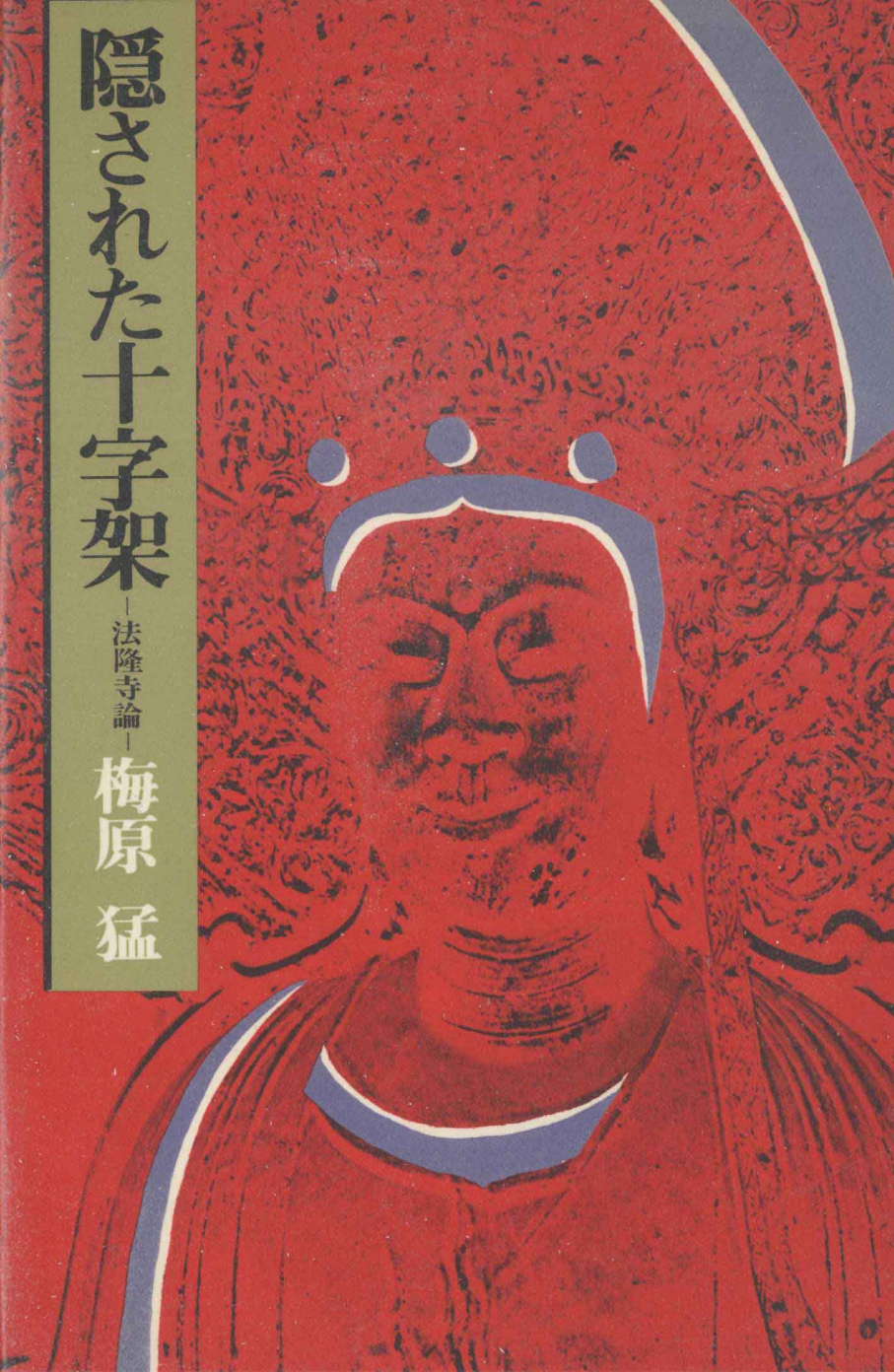


隠された十字架

— 法隆寺論 —

梅原 猛



隠された十字架

—法隆寺論—

梅原 猛



隠かくされた十字架じゆうじか
——法隆寺論ほうりゅうじろん——

昭和四十七年五月二十日 発行
昭和四十七年九月五日 七刷

定価一〇〇〇円

著者 梅原猛うめはら たけし

発行者 佐藤亮一

活版 株式会社精興社

写真版 学術写真製版所

原色版 半七写真印刷工業

製本 大口製本

発行所 株式会社新潮社

東京郵便番号
東京都新宿区矢来町一六二
電話東京〇三二六〇一
強管東京八〇〇一八番

© 1972 Takeshi Umehara, Printed in Japan

（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

はじめに

この本を読むにさいして、読者はたった一つのことを要求されるのである。それは、ものごとを常識ではなく、理性でもって判断することである。常識の眼でこの本を見たら、この本は、すばらしき寺、法隆寺と、すばらしき人、聖徳太子にたいする最大の冒瀆に見えるであろう。日本人が、千何百年もの間、信じ続けてきた法隆寺像と太子像が、この本によって完全に崩壊する。

冒瀆の書よ、破壊の書よ、危険の書よ、妄想の書よ、人が健全な常識と、正しい良心をもてばもつほど、人はこの本にたいしてそういう非難の言葉を投げつけるであろう。真の意味において革命的なあらゆる学説が受けねばならぬそのような非難を、私もまた甘んじて受けようと思うが、一言のアポロギアが許されてよいであろう。私は哲学を天職として選んだ。哲学というのは、文字通り、フィロソフィア、知を愛すること、名誉や、権力や、金銭より、何よりも真理を愛することである。しかし、真理を愛することは容易なことではない。なぜなら、人間というものはとかくきびしい真理の女神より、虚偽の淫女につかえることを好むものであるからである。そして、虚偽の淫女が、常識という仮面をかむって、長い間人々に信じられてるとき、あたかもその淫女は、真理の女神より一層女神らしく見えるからである。

それ故に、哲学の仕事は徹底的な常識否定の仕事から始まる。それは多くの人々がそれに依拠し

ている常識を否定して、人々を懷疑の中につき落とし、そこから新たに根源的な思惟をはじめさせようとする仕事である。この仕事は本来危険な仕事である。この危険な情熱に憑かれたソクラテスは、そのためにアテナイの常識人の怒りを買ひ、ついにその命を落した。

ソクラテスの徒として、私がここで行なつたのは、こういう常識の根本否定と、かくされた真理の再発見であつた。ここで日本の古代に関する長い間の常識が否定され、隠された真理が現われる。ソクラテスは真理の認識は想起によって起るという。人間の魂は、かつて真理の国にいて、真理をはっきり見ていた。しかし、今や人間は現象の国に生れて、真理をはっきり見る眼を失つた。それ故、この現象の国で、真理を認識するためには、かつて彼の魂がそこにいた真理の国を想起すればよいのである。

プラトンの『メノン』にかかれたこの言葉を、今、私は感激をもって思い出す。ここで私の認識の意志は過去へ向つていた。法隆寺が、その造られた時点において、どういう意味をもつていたかが、私の問いであつた。しかし、千年以上もたつて、真理はおおいかくされ、誤つた見解が常識として通用していたために、法隆寺は謎に包まれた寺となつていた。私はある日、その暗い謎の底に真理が微笑みかけるのを見た。推論によって、その真理をひき出して見ると、真理は確固とした体系をもち、あたかも想起によつて、過去そのままがそこに再現されるかのようであつた。私が真理を発見したのではない。真理が長い間の隠蔽に耐えかねて、私に語りかけてきたのである。

どうやら私の言葉は、一つの本の序文の言葉としては、いささかひびきが高すぎるようである。冷静に事実を語ろう。私が法隆寺にかんする新しい仮説に気づいたのは、一昨年の春であつた。その頃、私はそれより約半年前に考へつた別の仮説の追求に夢中になつていた。それは『古事記』『日本書紀』にかんする仮説である。『古事記』と『日本書紀』の制作主体を藤原不比等と考へ、『記

『紀』において語られている日本神話を律令体制にもとづく宗教改革の神話と考える仮説である。この仮説に到達したのは、出雲神話にかんする根本的疑問からであるが、その一連の仮説構成の過程——私はそれを真理発見の過程と呼びたいのであるが——その過程については、次の著書『神々の流竄』においてくわしく語ることにしよう。とにかく私は『記紀』を藤原不比等の制作のもとに考えるという大いなる仮説を、私の頭で再認識しつつ、その大いなる仮説をめぐる山脈をあちこちたどっていた。そして、その大いなる仮説の山脈をたどっていたとき、私ははしくもその山脈が法隆寺にも通じていることを見出したのである。

それは、一九七〇年の四月のある日であった。私は何げなく天平十九年（七四七）に書かれた法隆寺の『資財帳』を読んでいた。そこで私は巨勢徳太が孝徳天皇に頼んで、法隆寺へ食封三百戸を給わっているのを見た。巨勢徳太というのは、かつて法隆寺をとりかこみ、山背大兄皇子はじめ、聖徳太子一族二十五人を虐殺した当の本人ではないか。その男が、どうして法隆寺に食封を寄附する必要があるのか。日本の歴史を少しかじったものとして私は知っていた。日本において、多く勝者は自らの手で葬った死者を、同じ手でうやうやしく神とまつり、その葬られた前代の支配者の霊の鎮魂こそ、次の時代の支配者の大きな政治的、宗教的課題であることを。私はここに日本の神まつりのもっとも根本的な意味があると思っていた。

もしも法隆寺に太子一族の虐殺者達によって食封が与えられているとすれば、法隆寺もまた後世の御霊神社や、天満宮と同じように、太子一族の虐殺者達によって建てられた鎮魂の寺ではないか。『資財帳』は一旦停止された食封が再び与えられたのが、養老六年（七二二）と、天平十年（七三八）であることをしめしていた。ところが、この養老六年と天平十年というのは、いずれも当時の藤原氏の権力者が死んで、藤原氏及び藤原氏の力で政權をにぎっていた皇族達が危機におち入った

年であった。なぜ藤原氏の権力者の死後、食封が法隆寺に下されるのであろう。巨勢徳太の場合と同じように、それは太子の霊への恐怖ゆえであろう。太子一族と蘇我氏の滅亡、彼等の犠牲の上に大化改新はなされ、舒明帝の子孫と藤原氏が支配する時代が来た。殺害者の子孫たちは、彼らの父祖の死に見えざる怨霊の復讐を感じて、その霊を手厚くまつろうとしたのではないか。

私はその仮説に到達したときの魂の興奮を忘れることが出来ない。私は、たかぶった心を抑えて、一夜あれこれ推論をめぐらした。法隆寺が聖徳太子一族の鎮魂のための寺であるとしたら。この仮説をとるとき、今まで長い間謎とされてきた、私にとっても長い間謎であった法隆寺の秘密が一気にとける思いであった。

法隆寺にかんする解説書を読んで見るがよい。それが良心的な解説書であればあるほど、法隆寺には多くの謎があることが指摘されている。中門の真中の柱、金堂の三尊、塔の実際の高さと『資財帳』に書かれた高さとのくいちがい、奇怪なる顔をしていられる救世観音と、その異常なる秘密隠蔽への意志。とにかく法隆寺には分らないことが多いのである。それゆえ、私は、法隆寺を学生時代以来、十数回おとずれたが、法隆寺はその時まで、全く分らない寺であった。そして、私の処女出版であり、今は仏像の解説書としてあまねく読まれている、望月信成、佐和隆研の両先生との共著『仏像―心とかたち』においても、私は法隆寺の仏像について詳細にふれることができなかった。法隆寺の仏像は、ほとんどすべて仏像の一般的な特徴を逸脱しているからである。釈迦如来といわれ、薬師如来といわれるものも、図像学的には、釈迦仏、薬師仏の一般的特徴を大きく逸脱しているのである。仏像ばかりではなく、建築においても、工芸においても、法隆寺には、建築学や工芸学の、一般的説明によっては理解出来ないものが多い。

こういう謎をとくには、もはや、個々の仏像学や、建築学の問題を越えて、法隆寺一般がいかな

る意味をもつかという総合的な問いを問わねばならないが、そういう問いが今までは、全く欠如していた。法隆寺にあるすべての仏像、すべての建築、すべての工芸を統一して、それらに意味を与えるもの、そういう全体的なもの、総合的なものへの問いなしに、法隆寺は理解されることが出来ないのに、今まで法隆寺は分析的・部分的にのみ研究されてきたのである。

そのことは法隆寺にかんする研究にばかりあてはまるものではない。日本の古代学の全体の欠陥なのである。現代において、すべての学問は分業の方向をたどっている。美術史学にしても、ある学者は彫刻のみを、ある学者は建築のみを研究する。それによってたしかに学問は、より精密になり、より正確になるが、同時に全体的な視野を見失いやすい。ゼーデルマイヤーのいう中心の喪失が、現代文化の運命であろうが、そういう中心を喪失した文化の中に生き、中心を喪失した分業化された学問になれているわれわれは、中心が厳然として存在し、その中心によってすべてのものが統一され、すべてのものが意味を与えられていた時代の文化遺産を研究する場合にも、中心を喪失した学問によって、よく理解することが出来ると考えているのである。

すべての文化を文化たらしめる統一的な意味を研究すること、それこそまさに哲学に課せられた仕事なのである。哲学的思惟の特徴は、まさに総合性にあるが、この総合性の認識がまさにここで、日本の古代学にも必要だったわけである。私ははっきりいいたい、すでに、おどろくほど精密になった個々のジャンルの研究の成果において、法隆寺にかんする真理は解明される準備が十分とのえられていたのである。建築学における石田茂作氏、大岡実氏、竹島卓一氏などの研究、仏像学における望月信成氏、佐和隆研氏、長広敏雄氏などの意見、および高村光太郎氏や亀井勝一郎氏の詩人的な直観などは、ここで私が体系的に展開した仮説の真理性を暗示しているように思われる。つまり、分業化され、精密化された法隆寺にかんする多くの研究によって、私の学説はすでに用意

され、私はそれらの研究を観点をかえて見直し、それらを綜合すればよかったわけである。すでに真理を示す正しい点は、多くの学者によって見出されていた。その点をたどって一つの正しい図形を画くことが私の仕事であった。今まで誰によってもそのような図形が画かれなかったのは、今まで誰もが、法隆寺にかんする通説、常識にとらわれて、通説、常識を根本的に疑って見ようとしなかったからである。コロンブスの卵のように、発見してしまえば実に簡単なことなのである。

私とその仮説に到達した日から、私は改めて法隆寺にかんする多くの文献をよみあさり、何度か現場へ行って、自分の眼でそれをたしめしたのである。不思議なことには、ちょうど、磁石に金属が向うからひつついてくるように、法隆寺にかんする多くの事実が向うから私の仮説のまわりにひつついてきたのである。今まで如何なる理論によっても説明出来なかった法隆寺にかんするすべての謎が、私の仮説によって、一つ一つ明瞭に説明されてくるのであった。ちょうど私が、このような仮説を思いついてから一年後、一九七一年の四月には、聖徳太子の死後千三百五十年を記念して、聖霊会がもよおされた。この聖霊会は、文字どおり恨みをのんで、この斑鳩の地で死んでいった、太子一族の鎮魂のまつりとしか私には思われなかった。それを見て私はもう間違いはないと、一層私の仮説の正しさを確信するようになったのである。千三百五十年祭にあたって太子は私に隠された歴史の真相を告げたまわったのであろうか。私は太子は日本における最初の理想主義者であったと思う。そのあまりに高すぎる理想主義ゆえに、太子は孤立し、太子一家は悲劇的な最後をとげたが、太子の理想追求の精神と真理愛の精神は、その悲劇性ゆえにかえって輝きをますのである。太子にかんする間違った理解をやめさせ、太子一家の深い悲劇性を理解することこそ、真に太子を崇拜する道であると私は思う。太子の無念なる魂が、太子の怨霊が、私に歴史の真相を教えたとしか、私には思われないのである。

ここで展開された私の仮説が正しいかどうか、その判断を、私は現在及び未来の読者にまかせるより外はないが、一般に学問において、真理とは何であるかを、一言説明しておく必要があるだろう。

それはもっとも簡単で、もっとも明晰な前提でもって、もっとも多くの事実を説明する仮説と考えて差支えないであろう。われわれは地動説を真理として、天動説を誤謬と考えているが、それは地動説をとった方が天動説をとったときより、観察によってたしかめられる天体現象が、はるかに明瞭に、はるかに簡単に説明されうるからである。地動説が百パーセント真理であるわけではないのである。それは今でも一つの仮説にすぎないものであるが、その仮説によって、今まで、天動説によって説明されなかった現象が、より明瞭に、より簡単に説明される以上は、それは、それ以上、明瞭簡単に天体現象を説明出来る仮説が発見されぬ限り、その真理性の座を維持することが出来るのである。もしも地動説では説明されぬ天体現象が見出され、それをより明瞭に、より簡単に説明する理論が見つかったら、地動説は、真理性の位置を別の仮説にゆずらねばならぬであろう。

人文科学においても、ほぼ同じことがあてはまる。私の法隆寺にかんする仮説が、たとえどんなに簡単であり、それによって、今までの理論によって説明されなかった法隆寺の謎が、どんなに明らかに説明されたとしても、それは絶対の真理性を主張するわけにはゆかないであろう。他日、私の仮説以上に簡単であり、私の仮説以上に、明らかに法隆寺にかんする多くの謎を証明する仮説がたてられたら、私の仮説はその真理性の位置を新しい仮説にゆずらねばならぬであろう。

もとより、専門の歴史家でも、仏像学者でも、建築学者でもない私は、認識の過程で若干の誤りを犯しているかもしれない。あるいはまた、私の想像力が事実をこえて、空想の世界へ迷いこんだところも、少しはあるかもしれない。そういう個々のミスを指摘していただくのも大いに結構であるが、願わくば、それと共に、この本の根底にある理論そのものを問題としてほしいのである。一

且、こういう仮説が提出されたからには、もはや、古い常識と通説へ帰ることは出来ないと思う。この仮説の否定は、この仮説以上の理論的整合性をもった他の仮説の創造によってのみ可能なのである。願わくば、私の大胆なるこの仮説が、はなはだ認識がおくれていると思われる、日本の古代学の発展の刺激にならんことを。

最後に、このような仮説発見の契機となったもう一つ別な古代にかんする私の仮説、法隆寺にかんする仮説より、もっと根本的な、もっと壮大な仮説にかんして、ここで一言ことわっておく必要がある。なぜなら私の古代研究は、日本神話についての疑いからはじまり、ついで『古事記』『日本書紀』の著者の問題にいたり、その問題の探求の過程で、法隆寺にぶつかったからである。

そして、雑誌「すばる」の一号、二号に、『神々の流嶺』『陰の部分』の題のもとで、日本神話や『記紀』について論じ、法隆寺について論じたのは、その三号から五号までにおいてであった。発見の順序、雑誌掲載の順序と著書発行の順序が逆になってしまった。

その理由は、日本神話、あるいは『記紀』にかんする私の研究が不十分であり、種々の誤謬をふくんでいることが分ったからである。私は、私が一生経験したことのない不思議なエロスに導かれて、古代研究に熱中したが、当時の私には、こういう研究を進めるのに十分な学問的用意がかけられていたように思われる。突然、金の鉾脈を見出し、興奮して、あまりにも不用意に金鉾を掘りすすめた人のように、私はその一端を見つけた鉾脈を夢中で掘っていき、あまりにも性急に、そこで見出した鉾石を、これは金だ、これは銅だといったが、私が金であるといった鉾石が銅であり、銅であるといった鉾石が金であったりすることもあった。時には、私は少しでもない瓦礫を金とって、人人の失笑をかったこともあったようだ。今は少し勉強したおかげで、かつての私をおそった誤謬がよくわかるが、こうした誤謬なしに、私を夢中にさせた認識の情熱はありえず、こうした誤謬が次

の大きいなる発見に私を導いたことは否定できないと私は思う。

神話と『記紀』にかんしては、もう一度書きなおすより仕方がないのである。私は今年中には、『神々の流竄』と題して神話や『記紀』にかんする研究をまとめたいと思うが、あるいは少しは遅れるかもしれない。この神話と『記紀』にかんする研究において、私は上山春平氏の助けをえたというより、この一連の研究は、上山氏と理論的な二人三脚といふべき認識作業によってつくられたのである。上山氏は私の十五年来の最大の認識の友であるが、この仕事においても、私は仏教の研究からさかのぼり、彼は縄文文化論から下って、共同の研究テーマを見つけたのである。この場合、最初、この領域にエロスをもちこんだのは私であるが、上山氏の明晰な判断なしには、とうていこのような短期間に、このような理論の構成は不可能であつたであらう。カントは、直観なき概念は空虚であり、概念なき直観は盲目であるといつたが、この二人の共同作業において、私はより多く直観の役目を、上山氏はより多く概念の役割を分担したようである。もしも、私一人でこの仕事を進めていたとすれば、私の直観ははてしない空想の中をさまよひ、私の仕事は学者の仕事であるより、小説家の仕事になつていたであらう。上山氏は、雑誌「歴史と人物」に『神々の体系』と題して古代論を連載中であるが、たとえ、共同研究によって真理を発見しても、再びそれを個人の個人的な文章によって書きとめるより仕方がないのが人文科学の運命なのである。

日本の神話および『記紀』にかんする、かつての私の認識において、その後、検討した結果、どうもあやしいと思われる部分と、ますます確かであると思われる部分がある。あやしいと思われる部分は、ヤマタノオロチや、イナバのシロウサギにかんする部分で、ますます間違ひがないと思われる部分は、『記紀』が藤原不比等の手によってつくられたものであり、『記紀』の神話は、律令体制に應じる宗教改革のための神話であつたということである。つまり、藤原氏は天武―持統の直系

の皇族を、アマテラス神話によって他の皇族および臣下と區別して、絶対化するとともに、その後にある自分達の政治権、軍事権、祭祀権独占の主張をタカミムスビ、タケミカズチ、アメノコヤネが活躍する神話に盛ろうとしたものであり、出雲はこういう政治体制にじまになった古い神様を流した場所であるという部分である。これについてはできるだけ認識の誤謬を少なくして稿を新たに論じたい。

とにかく、ここ二年半ほど私の魂を熱中させた古代にかんする認識の最初の本を、私はここに刊行することになった。私の心は処女作を世に送り出す時以上の喜びと不安にふるえているのである。

一九七二年二月一日

梅原 猛

隠された十字架・目次

はじめに

第一部 謎の提起

一九

法隆寺の七不思議 私の考える法隆寺七つの謎 再建論と非再建論の対

決 若草伽藍址の発見と再建の時代

第二部 解決への手掛り

四五

第一章 なぜ法隆寺は再建されたか

四七

常識の盲点 たたりの条件 中門の謎をめぐって 偶数の原理に秘めら

れた意味 死の影におおわれた寺 もう一つの偶数原理——出雲大社

第二章 誰が法隆寺を建てたか

五九

法隆寺にさす橘三千代の影 『資財帳』の語る政略と恐怖 聖化された上

宮太子の謎 『日本書紀』のもう一つの潤色 藤原——中臣氏の出身

『書紀』の主張する入鹿暗殺正当化の論理 山背大兄一族全滅の三様の記

述 孝徳帝一派の悲喜劇 蘇我氏滅亡と氏族制崩壊の演出者——藤原鎌

足 陰の支配と血の肅清 権力の原理の貫徹——定慧の悲劇 因果律の

偽造 怖るべき怨霊のための鎮魂の寺

第三章 法隆寺再建の政治的背景……………三五

思想の運命と担い手の運命 中臣・神道と藤原・仏教の使いわけ 天武に

よる仏教の国家管理政策 日本のハムレット 母なる寺——川原寺の建

立 蘇我一門の祟り鎮めの寺——橘寺の役割 仏教の日本定着——国家的

要請と私的祈願 飛鳥四大寺と国家権力 『記紀』思想の仏教的表現——

藥師寺建立の意志 権力と奈良四大寺の配置 遷都に秘めた仏教支配権略

奪の狙い 藤原氏による大寺の権利買収 興福寺の建設と藥師寺の移転

道慈の理想と大官大寺の移転 二つの法興寺——飛鳥寺と元興寺 宗教政

治の協力者・義淵僧正 神道政策と仏教政策の相関 伊勢の内宮・藥師寺・

太上天皇をつらぬく発想 藤原氏の氏神による三笠山の略奪 土着神の抵

抗を物語る二つの伝承 流竄と鎮魂の社寺

第三部 真実の開示……………三五

第一章 第一の答（『日本書紀』『続日本紀』について）……………三〇

権力は歴史を偽造する 官の意志の陰にひそむ史の証言

第二章 第二の答（『法隆寺資財帳』について）……………三〇

『縁起』は寺の権力に向けた自己主張である 聖徳太子の經典講読と『書紀』

の試みた合理化 齊明四年の死霊による『勝鬘經』、『法華經』の講義

第三章 法隆寺の再建年代 二四七

根強い非再建論の亡霊 浄土思想の影響を示す法隆寺様式 法隆寺の再建

は和銅年間まで下る

第四章 第三の答（中門について） 二六七

中門は怨霊を封じ込めるためにある

第五章 第四の答（金堂について） 二七一

金堂の形成する世界は何か——中心を見失った研究法 謎にみちた金堂とそ

の仏たち 薬師光背の銘は『資財帳』をもとに偽造された 三人の死霊を

背負った釈迦像 奈良遷都と鎮魂寺の移転 仮説とその立証のための条

件 両如来の異例の印相と帝王の服装 隠された太子一家と剣のイメー

ジ 舍利と火焰のイメージの反復 金堂は死霊の極楽往生の場所 オイ

ディプスの悲劇の一家

第六章 第五の答（五重塔について） 三三五

塔の舍利と四面の塑像の謎 釈迦と太子のダブルイメージ 死・復活ドラ